
【テキスト中に現れる記号について】

《 》：ルビ
(例) 齡《よはひ》

|：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号
(例) 親子|養族《けんぞく》

[#]：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定
(例) [#ここから3字下げ]

[#ここから3字下げ、30字詰め]
たとひ三百歳の齡《よはひ》を保ち、楽しみ身に余ると云ふとも、未来永々の果しなき楽しみに比ぶれば、夢幻《ゆめまぼろし》の如し。
[#地付き] 慶長訳 Guia do Pecador
[#ここで字下げ終わり]

[#ここから3字下げ]
善の道に立ち入りたらん人は、御教《みをしへ》にこもる不可思議の甘味を覚ゆべし。
[#地付き] 慶長訳 Imitatione Christi
[#ここで字下げ終わり、30字詰め終わり]

—

去《さ》んぬる頃、日本長崎の「さんた・るちや」と申す「えけれしや」(寺院)に、「ろおれんぞ」と申すこの国の少年がござつた。これは或年御降誕の祭の夜、その「えけれしや」の戸口に、餓ゑ疲れてうち伏して居つたを、参詣の奉教人衆《ほうけうにんしゆう》が介抱し、それより伴天連《ばてれん》の憐みにて、寺中に養はれる事となつたげでござるが、何故かその身の素性《すじやう》を問へば、故郷《ふるさと》は「はらいそ」(天国)父の名は「でうす」(天主)などと、何時も事もなげな笑に紛らいて、とんとまことは明した事もござない。なれど親の代から「ぜんちよ」(異教徒)の輩《ともがら》であらなんだ事だけは、手くびにかけた青玉《あをだま》の「こんたつ」(念珠)を見ても、知れたと申す。されば伴天連はじめ、多くの「いるまん」衆(法兄弟)も、よも怪しいものではござるまいとおぼされて、ねんごろに扶持して置かれたが、その信心の堅固なは、幼いにも似ず「すperiおれす」(長老衆)が舌を捲くばかりであつたれば、一同も「ろおれんぞ」は天童の生れがはりであらうなど申し、いづくの生れ、たれの子とも知れぬものを、無下《むげ》にめでいつくしんで居つたげでござる。

して又この「ろおれんぞ」は、顔かたちが玉のやうに清らかであつたに、声ざまも女のやうに優しかつたれば、一《ひと》しほ人々のあはれみを惹《ひ》いたのでござらう。中でもこの国の「いるまん」に「しめおん」と申したは、「ろおれんぞ」を弟《おとと》のやうにもてなし、「えけれしや」の出入りにも、必《かならず》仲よう手を組み合せて居つた。この「しめおん」は、元さる大名に仕へた、槍一すぢの家がらなものぢや。されば身のたけも抜群なに、性得《しやうとく》の剛力であつたに由つて、伴天連が「ぜんちよ」ばらの石瓦にうたるるを、防いで進げた事も、一度二度の沙汰ではござない。それが「ろおれんぞ」と睦《むつま》じうするさまは、とんと鳩になつむ荒鷺のやうであつたとも申さうか。或は「ればのん」山の檜《ひのき》に、葡萄《えび》かづらが纏《まと》ひついて、花咲いたやうであつたとも申さうぞ。

さる程に三年あまりの年月は、流るやうにすぎたに由つて、「ろおれんぞ」はやがて元服もすべき時節となつた。したがその頃怪しげな噂が伝はつたと申すは、「さんた・るちや」から遠からぬ町方の傘張の娘が、「ろおれんぞ」と親しうすると云ふ事ぢや。この傘張の翁《おきな》も天主の御教を奉ずる人故、娘ともども「えけれしや」へは参る慣《ならはし》であつたに、御祈の暇にも、娘は香炉をさげた「ろおれんぞ」の姿から、眼を離したと申す事がござない。まして「えけれしや」への出入りには、必《かならず》髪かたちを美しうして、「ろおれんぞ」のある方へ眼づかひをするが定《ぢやう》であつた。さればおのづと奉教人衆の人目にも止り、娘が行きずりに「ろおれんぞ」の足を踏んだと云ひ出すものもあれば、二人が艶書を取りかはすをしかと見とどけ

たと申すものも、出て来たげでござる。

由つて伴天連にも、すて置かれず思《おぼ》されたのでござらう。或日「ろおれんぞ」を召されて、白ひげを噛みながら、「その方、傘張の娘と兎角の噂ある由を聞いたが、よもやまことではあるまい。どうぢや」ともの優しく尋ねられた。したが「ろおれんぞ」は、唯《ただ》憂はしげに頭を振つて、「そのやうな事は一向に存じよう筈もござらぬ」と、涙声に繰返すばかり故、伴天連もさすがに我《が》を折られて、年配と云ひ、日頃の信心と云ひ、かうまで申すものに偽はあるまいと思されたげでござる。

さて一応伴天連の疑《うたがひ》は晴れてぢやが、「さんた・るちや」へ参る人々の間では、容易にとかうの沙汰が絶えさうもござない。されば兄弟同様に居つた「しめおん」の気がかりは、又人一倍ぢや。始はかやうな淫《みだら》な事を、ものものしう詮議立てするが、おのれにも恥しうて、うちつけに尋ねようは元より、「ろおれんぞ」の顔さへまさかとは見られぬ程であつたが、或時「さんた・るちや」の後の庭で、「ろおれんぞ」へ宛てた娘の艶書を拾うたに由つて、人気《ひとけ》ない部屋にゐたを幸《さいはひ》、「ろおれんぞ」の前にその文をつきつけて、嚇《おど》しつ賺《すか》しつ、さまざまに問ひただいた。なれど「ろおれんぞ」は唯、美しい顔を赤らめて、「娘は私に心を寄せましたげでござれど、私は文を貰うばかり、とんと口を利《き》いた事もござらぬ」と申す。なれど世間のそしりもある事でござれば、「しめおん」は猶《なほ》も押して問ひ詰《なじ》つたに、「ろおれんぞ」はわびしげな眼で、ぢつと相手を見つめたと思へば、「私はお主《ぬし》にさへ、嘘をつきさうな人間に見えるさうな」と、咎《とが》めるやうに云ひ放つて、とんと燕《つばくろ》か何ぞのやうに、その儘つと部屋を立つて行つてしまつた。かう云はれて見れば、「しめおん」も己の疑深かつたのが恥しうもなつたに由つて、悄悄《すごすご》その場を去らうとしたに、いきなり駆けこんで来たは、少年の「ろおれんぞ」ぢや。それが飛びつくやうに「しめおん」の頸《うなじ》を抱くと、喘《あへ》ぐやうに「私が悪かつた。許して下さい」と囁《ささや》いて、こなたが一言《ひとこと》も答へぬ間に、涙に濡れた顔を隠さう為か、相手をつきのけるやうに身を開いて、一散に又元来た方へ、走つて往《い》んでしまつたと申す。さればその「私が悪かつた」と囁いたのも、娘と密通したのが悪かつたと云ふのやら、或は「しめおん」につれなうしたのが悪かつたと云ふのやら、一円合点《いちゑんがてん》の致さうやうがなかつたとの事でござる。

するとその後間もなう起つたのは、その傘張の娘が孕《みごも》つたと云ふ騒ぎぢや。しかも腹の子の父親は、「さんた・るちや」の「ろおれんぞ」ぢやと、正《まさ》しう父の前で申しあげてござる。されば傘張の翁は火のやうに憤《いきどほ》つて、即刻伴天連のもとへ委細を訴へに参つた。かうなる上は「ろおれんぞ」も、かつつ云ひ訳の致しやうがござない。その日の中に伴天連を始め、「いるまん」衆一同の談合に由つて、破門を申し渡される事になつた。元より破門の沙汰がある上は、伴天連の手もとをも追ひ払はれる事でござれば、糊口によすがに困るのも目前ぢや。したがかやうな罪人を、この儘「さんた・るちや」に止めて置いては、御主《おんあるじ》の「ぐろおりや」（栄光）にも関《かかは》る事ゆゑ、日頃親しう致いた人々も、涙をのんで「ろおれんぞ」を追ひ払つたと申す事でござる。

その中でも哀れをとどめたは、兄弟のやうにして居つた「しめおん」の身の上ぢや。これは「ろおれんぞ」が追ひ出されると云ふ悲しさよりも、「ろおれんぞ」に欺かれたと云ふ腹立たしさが一倍故、あのいたいけな少年が、折からの風《こがらし》が吹く中へ、しをしをと戸口を出かかつたに、傍から拳《こぶし》をふるうて、したたかその美しい顔を打つた。「ろおれんぞ」は剛力に打たれたに由つて、思はずそこへ倒れたが、やがて起きあがると、涙ぐんだ眼で、空を仰ぎながら、「御主も許させ給へ。『しめおん』は、己《おの》が仕業もわきまへぬものでござる」と、わななく声で祈つたと申す事ぢや。「しめおん」もこれには気が挫けたのでござらう。暫くは唯戸口に立つて、拳を空《くう》にふるうて居つたが、その外の「いるまん」衆も、いろいろととりないたれば、それを機会《しほ》に手を束《つか》ねて、嵐も吹き出でようず空の如く、凄《すさま》じく顔を曇らせながら、悄悄《すごすご》「さんた・るちや」の門を出る「ろおれんぞ」の後姿を、貪るやうにきつと見送つて居つた。その時居合はせた奉教人衆の話を伝へ聞けば、時しも風にゆらく日輪が、うなだれて歩む「ろおれんぞ」の頭のかなた、長崎の西の空に沈まうず景色であつたに由つて、あの少年のやさしい姿は、とんと一天の火焰の中に、立ちきはまつたやうに見えたと申す。

その後の「ろおれんぞ」は、「さんた・るちや」の内陣に香炉をかざした昔とは打つて変つて、町はづれの非人小屋に起き伏しする、世にも哀れな乞食《こつじき》であつた。ましてその前身は、「ぜんちよ」の輩《ともがら》にはゑとりのやうにさげしまるる、天主の御教を奉ずるものぢや。されば町を行けば、心ない童部《わらべ》に嘲《あざけ》らるるは元より、刀杖瓦石《たうちやうぐわせき》の難に遭《あ》うた事も、度々ござるげに聞き及んだ。いや、嘗《か》つては、長崎の町にはびこつた、恐しい熱病にとりつかれて、七日七夜の間、道ばたに伏しまるんでは、苦み悶《もだ》えたとも申す事でござる。したが、「でうす」無量無辺の御愛憐は、その都度「ろおれんぞ」が一命を救はせ給うたのみか、施物の米銭のない折々には、山の木の実、海の魚介など、その日の糧《かて》を恵ませ給ふのが常であつた。由つて「ろおれんぞ」も、朝夕の祈は「さんた・るちや」に在つた昔を忘れず、手くびにかけた「こんたつ」も、青玉の色を変へなかつたと申す事ぢや。なんの、そのみか、夜毎に更闌《かうた》けて人音も静まる頃となれば、この少年はひそかに町はづれの非人小屋を脱け出《いだ》いて、月を踏んでは住み馴れた「さんた・るちや」へ、御主「ぜす・きりしと」の御加護を祈りまゐらせに詣でて居つた。

なれど同じ「えけれしや」に詣づる奉教人衆も、その頃はとんと「ろおれんぞ」を疎《うと》んじはてて、伴天連はじめ、誰一人憐みをかくるものもござらなんだ。ことわりかな、破門の折から所行無慚《しよぎやうむざん》の少年と思ひこんで居つたに由つて、何として夜毎に、独り「えけれしや」へ参る程の、信心ものぢやとは知られうぞ。これも「でうす」千万無量の御計らひの一つ故、よしない儀とは申しながら、「ろおれんぞ」が身にとつては、いみじくも亦哀れな事でござつた。

さる程に、こなたはあの傘張の娘ぢや。「ろおれんぞ」が破門されると間もなく、月も満たず女の子を産み落いたが、さすがにかたくなしい父の翁も、初孫の顔は憎からず思つたのでござらう、娘ともども大切に介抱して、自ら抱きもしかかへもし、時にはもてあそびの人形などもとらせたと申す事でござる。翁は元よりさもあらうずなれど、ここに稀有《けう》なは「いるまん」の「しめおん」ぢや。あの「ぢやば」（悪魔）をも挫《ひし》がうず大男が、娘に子が産まれるや否や、暇ある毎に傘張の翁を訪れて、無骨な腕に幼子を抱き上げては、にがにがしげな顔に涙を浮べて、弟と愛《いつく》しんだ、あえかな「ろおれんぞ」の優姿を、思ひ慕つて居つたと申す。唯、娘のみは、「さんた・るちや」を出でてこの方、絶えて「ろおれんぞ」が姿を見せぬのを、怨めしう歎きわびた気色《けしき》であつたれば、「しめおん」の訪れるのさへ、何かと快からず思ふげに見えた。

この国の諺《ことわざ》にも、光陰に閑守《せきもり》なしと申す通り、とかうする程に、一年《ひととせ》あまりの年月は、瞬《またた》くひまに過ぎたと思召《おぼしめ》されい。ここに思ひもよらぬ大變が起つたと申すは、一夜の中に長崎の町の半ばを焼き払つた、あの大火事のあつた事ぢや。まことにその折の景色の凄じさは、末期《まつご》の御裁判《おんさばき》の喇叭《らつぱ》の音が、一天の火の光をつんざいて、鳴り渡つたかと思はれるばかり、世にも身の毛のよだつものでござつた。その時、あの傘張の翁の家は、運悪う風下にあつたに由つて、見る見る焰に包れたが、さて親子・眷族《けんぞく》、慌てふためいて、逃げ出《いだ》いて見れば、娘が産んだ女の子の姿が見えぬと云ふ始末ぢや。一定《いちぢやう》、一間《ひとま》どころに寝かいて置いたを、忘れてここまで逃げのびたのであらうず。されば翁は足ずりをして罵りわめく。娘も亦、人に遮《さへぎ》られずば、火の中へも馳《は》せ入つて、助け出さう気色《けしき》に見えた。なれど風は益《ますます》加はつて、焰の舌は天上の星をも焦さうず吼《たけ》りやうぢや。それ故火を救ひに集つた町方の人々も、唯、あれよあれよと立ち騒いで、狂気のやうな娘をとり鎮めるより外に、せん方も亦あるまじい。所へひとり、多くの人を押しわけて、馳《か》けつけて参つたは、あの「いるまん」の「しめおん」でござる。これは矢玉の下もくぐつたげな、逞しい大丈夫でござれば、ありやうを見るより早く、勇んで焰の中へ向うたが、あまりの火勢に辟易《へきえき》致いたのでござらう。二三度煙をくぐつたと見る間に、背《そびら》をめぐらして、一散に逃げ出いた。して翁と娘とが佇《たたず》んだ前へ来て、「これも『でうす』万事にかなはせたまふ御計らひの一つぢや。詮ない事とあきらめられい」と申す。その時翁の傍から、誰とも知らず、高らかに「御主《おんあるじ》、助け給へ」と叫ぶものがござつた。声ざまに聞き覚えもござれば、「しめおん」が頭《かうべ》をめぐらして、その声の主をきつと見れば、いかな事、これは紛《まが》ひもない「ろおれんぞ」ぢや。清らかに痩せ細つた顔は、火の光に赤うかがやいて、風に乱れる黒髪も、肩に余るげに思はれたが、哀れにも美しい眉目《みめ》のかたちは、一目見てそれと知られた。その「ろおれんぞ」が、乞食の姿のまま、群《むらが》る人々の前に立つて、目もはなたず燃えさかる家を眺めて居る。と思うたのは、まことに瞬《またた》く間もない程ぢや。一しきり焰を煽《あふ》つて、恐しい風が吹き渡つたと見れば、「ろおれんぞ」の姿はまつしぐらに、早くも火の柱、火の壁、火の梁《うつばり》の中にはいつて居つた。「しめおん」は思はず遍身に汗を流いて、空高く「くるす」（十字）を描きながら、己も「御主、助け給へ」と叫んだが、何故かその時心の眼には、夙《こがらし》に揺る日輪の光を浴びて、「さんた・るちや」の門に立ちきはまつた、美しく悲しげな、「ろおれんぞ」の姿が浮んだと申す。

なれどあたりに居つた奉教人衆は、「ろおれんぞ」が健気《けなげ》な振舞に驚きながらも、破戒の昔を忘れかねたのもござらう。忽《たちまち》兎角の批判は風に乗つて、人どよめきの上を渡つて参つた。と申すは、「さすが親子の情あひは争はれぬものと見えた。己が身の罪を恥づて、このあたりへは影も見せなんだ『ろおれんぞ』が、今こそ一人子の命を救はうとて、火の中へはいつたぞよ」と、誰ともなく罵りかはしたのでござる。これには翁《おきな》さへ同心と覚えて、「ろおれんぞ」の姿を眺めてからは、怪しい心の騒ぎを隠さうず為か、立ちつ居つ身を悶えて、何やら愚《おろか》しい事のみを、声高《こわだか》にひとりわめいて「わめいて」は底本では「わめいつて」居つた。なれど当の娘ばかりは、狂ほしく大地に跪《ひざまづ》いて、両の手で顔をうづめながら、一心不乱に祈誓を凝《こ》らいて、身動きをする気色さへもござない。その空には火の粉が雨のやうに降りかかる。煙も地を掃《はら》つて、面《おもて》を打つた。したが娘は黙然と頭を垂れて、身も世も忘れた祈り三昧《ざんまい》でござる。

とかうする程に、再《ふたたび》火の前に群つた人々が、一度にどつとどよめくかと思れば、髪をふり乱いた「ろおれんぞ」が、もろ手に幼子をかい抱いて、乱れとぶ焰の中から、天《あま》くだるやうに姿を現《あらは》した。なれどその時、燃え尽きた梁《うつばり》の一つが、俄《にはか》に半ばから折れたのでござらう。凄じい音と共に、一なだれの煙焰《えんえん》が半空《なかぞら》に進《ほとばし》つたと思ふ間もなく、「ろおれんぞ」の姿ははたと見えなくなつて、跡には唯火の柱が、珊瑚の如くそば立つたばかりでござる。

あまりの凶事に心も消えて、「しめおん」をはじめ翁まで、居あはせた程の奉教人衆は、皆目の眩《くら》む

思ひがござつた。中にも娘はけたたましく泣き叫んで、一度は脛 《はぎ》 もあらはに躍り立つたが、やがて雷
いかづち》に打たれた人のやうに、そのまま大地にひれふしたと申す。さもあらばあれ、ひれふした娘の手には
、何時かあの幼い女の子が、生死不定《しやうじふぢやう》の姿ながら、ひしと抱かれて居つたをいかにしよう
ぞ。ああ、広大無辺なる「でうす」の御知慧《おんちゑ》、御力は、何とたたへ奉る詞《ことば》だにござない
。燃え崩れる梁に打たれながら、「ろおれんぞ」が必死の力をしぼつて、こなたへ投げた幼子は、折よく娘の足
もとへ、怪我もなくまろび落ちたのでござる。

されば娘が大地にひれ伏して、嬉し涙に咽《むせ》んだ声と共に、もろ手をさしあげて立つた翁の口からは、
「でうす」の御慈悲をほめ奉る声が、自らおごそかに溢れて参つた。いや、まさに溢れようづけはひであつたと
も申さうか。それより先に「しめおん」は、さかまく火の嵐の中へ、「ろおれんぞ」を救はうず一念から、真一
文字に躍りこんだに由つて、翁の声は再《ふたたび》気づかはしげな、いたましい祈りの言《ことば》となつて
、夜空に高くあがつたのでござる。これは元より翁のみではござない。親子を囲んだ奉教人衆は、皆一同に声を
揃へて、「御主、助け給へ」と、泣く泣く祈りを捧げたのぢや。して「びるぜん・まりや」の御子《みこ》、な
べての人の苦しみと悲しみとを己《おの》がものの如くに見そなはず、われらが御主「ぜす・きりしと」は、遂
にこの祈りを聞き入れ給うた。見られい。むごたらしい焼けただれた「ろおれんぞ」は、「しめおん」が腕に抱
かれて、早くも火と煙とのただ中から、救ひ出されて参つたではないか。

なれどその夜の大変は、これのみではござなんだ。息も絶え絶えな「ろおれんぞ」が、とりあへず奉教人衆の
手に昇《か》かれて、風上にあつたあの「えけれしや」の門へ横へられた時の事ぢや。それまで幼子を胸に抱き
しめて、涙にくれてゐた傘張の娘は、折から門へ出でられた伴天連の足もとに跪《ひざまづ》くと、並み居る人
々の目前で、「この女子《をなご》は『ろおれんぞ』様の種ではおぢやらぬ。まことは妾が家隣の『ぜんちよ』
の子と密通して、まうけた娘でおぢやるわいの」と思ひもよらぬ「こひさん」（懺悔）を仕《つかま》つた。そ
の思ひつめた声ざまの震へと申し、その泣きぬれた双の眼のかがやきと申し、この「こひさん」には、露ばかり
の偽さへ、あらうとは思はれ申さぬ。道理《ことわり》かな、肩を並べた奉教人衆は、天を焦がす猛火も忘れて
、息さへつかぬやうに声を呑んだ。

娘が涙ををさめて、申し次いだは、「妾は日頃『ろおれんぞ』様を恋ひ慕うて居つたなれど、御信心の堅固さ
からあまりにつれなくもてなされる故、つい怨む心も出て、腹の子を『ろおれんぞ』様の種と申し偽り、妾につ
らかつた口惜しさを思ひ知らさうと致いたのでおぢやる。なれど『ろおれんぞ』様のお心の気高さは、妾が大罪
をも憎ませ給はいで、今宵は御身の危さをもうち忘れ、『いんへるの』（地獄）にもまがふ火焰の中から、妾娘
の一命を辱《かたじけな》くも救はせ給うた。その御憐み、御計らひ、まことに御主『ぜす・きりしと』の再来
かともをがまれ申す。さるにても妾が重々の極悪を思へば、この五体は忽《たちまち》『ぢやぼ』の爪にかかつ
て、寸々に裂かれようとも、中々怨む所はおぢやるまい。」娘は「こひさん」を致いも果てず、大地に身を投げ
て泣き伏した。

二重三重《ふたへみへ》に群つた奉教人衆の間から、「まるちり」（殉教）ぢや、「まるちり」ぢやと云ふ声
が、波のやうに起つたのは、丁度この時の事でござる。殊勝にも「ろおれんぞ」は、罪人を憐む心から、御主「
ぜす・きりしと」の御行跡を踏んで、乞食にまで身を落いた。して父と仰ぐ伴天連も、兄とたのむ「しめおん」
も、皆その心を知らなんだ。これが「まるちり」でなうて、何でござらう。

したが、当の「ろおれんぞ」は、娘の「こひさん」を聞きながらも、僅に二三度 | 頷《うなづ》いて見せたば
かり、髪は焼け肌は焦げて、手も足も動かぬ上に、口をきかう気色《けしき》さへも今は全く尽きたげでござる
。娘の「こひさん」に胸を破つた翁と「しめおん」とは、その枕がみに蹲《うづくま》つて、何かと介抱を致い
て居つたが、「ろおれんぞ」の息は、刻々に短うなつて、最期《さいご》ももはや遠くはあるまじい。唯、日頃
と変らぬのは、遙に天上を仰いで居る、星のやうな瞳の色ばかりぢや。

やがて娘の「こひさん」に耳をすまされた伴天連は、吹き荒《すさ》ぶ夜風に白ひげをなびかせながら、「さ
んた・るちや」の門を後にして、おごそかに申されたは、「悔い改むるものは、幸《さいはひ》ぢや。何しにそ
の幸なものを、人間の手に罰しようぞ。これより益《ますます》、『でうす』の御戒《おんいましめ》を身にし
めて、心静に末期《まつご》の御裁判《おんさばき》の日を待つたがよい。又『ろおれんぞ』がわが身の行儀を
、御主『ぜす・きりしと』とひとしく奉らうず志は、この国の奉教人衆の中にあつても、類《たぐひ》稀なる徳
行でござる。別して少年の身とは云ひ」ああ、これは又何とした事でござらうぞ。ここまで申された伴天連
は、俄《にはか》にはたと口を噤《つぐ》んで、あたかも「はらいそ」の光を望んだやうに、づつと足もとの「
ろおれんぞ」の姿を見守られた。その恭《うやうや》しげな容子《ようす》はどうぢや。その両の手のふるへざ
まも、尋常《よのつね》の事ではござるまい。おう、伴天連のからびた頬の上には、とめどなく涙が溢れ流れる
ぞよ。

見られい。「しめおん」。見られい。傘張の翁。御主「ぜす・きりしと」の御血潮よりも赤い、火の光を一身
に浴びて、声もなく「さんた・るちや」の門に横はつた、いみじくも美しい少年の胸には、焦げ破れた衣《ころ
も》のひまから、清らかな二つの乳房が、玉のやうに露《あらは》れて居るではないか。今は焼けただれた面輪
《おもわ》にも、自《おのづか》らなやさしさは、隠れようすべもあるまじい。おう、「ろおれんぞ」は女ぢや
。「ろおれんぞ」は女ぢや。見られい。猛火を後にして、垣のやうに佇んでゐる奉教人衆、邪淫の戒を破つたに

由つて「さんた・るちや」を逐《お》はれた「ろおれんぞ」は、傘張の娘と同じ、眼《ま》なざしのあでやかなこの国の女ぢや。

まことにその刹那《せつな》の尊い恐しさは、あたかも「でうす」の御声が、星の光も見えぬ遠い空から、伝はつて来るやうであつたと申す。されば「さんた・るちや」の前に居並んだ奉教人衆は、風に吹かれる穂麦のやうに、誰からともなく頭を垂れて、悉《ことごとく》「ろおれんぞ」のまはりに跪《ひざまづ》いた。その中で聞えるものは、唯、空をどよもして燃えしきる、万丈の焰の響ばかりでござる。いや、誰やらの啜《すす》り泣く声も聞えたが、それは傘張の娘でござらうか。或は又自ら兄とも思うた、あの「いるまん」の「しめおん」でござらうか。やがてその寂寞《じやくまく》たるあたりをふるはせて、「ろおれんぞ」の上に高く手をかざしながら、伴天連の御経を誦《ず》せられる声が、おごそかに悲しく耳にはいつた。して御経の声がやんだ時、「ろおれんぞ」と呼ばれた、この国のうら若い女は、まだ暗い夜のあなたに、「はらいそ」の「ぐろおりや」を仰ぎ見て、安らかなほほ笑みを唇に止めたまま、静に息が絶えたのでござる。……

その女の一生は、この外に何一つ、知られなんだげに聞き及んだ。なれどそれが、何事でござらうぞ。なべて人の世の尊さは、何ものにも換へ難い、刹那の感動に極るものぢや。暗夜の海にも譬《たと》へようず煩惱心《ぼんなうしん》の空に一波をあけて、未《いまだ》出ぬ月の光を、水沫《みなわ》の中に捕へてこそ、生きて甲斐ある命とも申さうず。されば「ろおれんぞ」が最期を知るものは、「ろおれんぞ」の一生を知るものではござるまいか。

二

予が所蔵に関る、長崎耶蘇会出版の一書、題して「れげんだ・おうれあ」と云ふ。蓋《けだ》し、LEGENDA AU EA の意なり。されど内容は必しも、西欧の所謂《いはゆる》「黄金伝説」ならず。彼土《かのど》の使徒聖人言行を録すると共に、併《あは》せて本邦西教徒が勇猛精進の事蹟をも採録し、以て福音伝道の一助たらしめんとせしものの如し。

体裁は上下二巻、美濃紙摺《みのがみずり》草体交《さうたいまじ》り平仮名文にして、印刷甚しく鮮明を欠き、活字なりや否やを明にせず。上巻の扉には、羅匈《ラテン》字にて書名を横書し、その下に漢字にて「御出世以来千五百九十六年、慶長二年三月上旬 | 鏤刻《るこく》也」の二行を縦書す。年代の左右には喇叭《らつぱ》を吹ける天使の画像あり。技巧 | 頗《すこぶる》幼稚なれども、亦 | 掬《きく》す可き趣致なしとせず。下巻も扉に「五月中旬鏤刻也」の句あるを除いては、全く上巻と異同なし。

両巻とも紙数は約六十頁にして、載《の》する所の黄金伝説は、上巻八章、下巻十章を数ふ。その他各巻の巻首に著者不明の序文及 | 羅匈《ラテン》字を加へたる目次あり。序文は文章 | 雅馴《がじゆん》ならずして、間々《まま》欧文を直訳せる如き語法を交へ、一見その伴天連たる西人の手になりしやを疑はしむ。

以上採録したる「奉教人の死」は、該《がい》「れげんだ・おうれあ」下巻第二章に依るものにして、恐らくは当時長崎の一西教寺院に起りし、事実の忠実なる記録ならんか。但、記事中の大火なるものは、「長崎港草」以下諸書に徴するも、その有無をすら明にせざるを以て、事実の正確なる年代に至つては、全くこれを決定するを得ず。

予は「奉教人の死」に於て、発表の必要上、多少の文飾を敢《あへ》てしたり。もし原文の平易雅馴なる筆致にして、甚しく毀損《きそん》せらるる事なからんか、予の幸甚とする所なりと云爾《しかいふ》。

[# 地から 2 字上げ] (大正七年八月)

底本：「現代日本文学大系 43 芥川龍之介集」筑摩書房

1968 (昭和43) 年8月25日初版第1刷発行

入力：j.utiyama

校正：八木正三

1998年6月14日公開

2004年3月16日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。